

認知症疾患における病態失認についての後ろ向き研究に関する研究のお知らせ

帝京大学医学部附属病院・板橋中央総合病院では以下の研究を行います。

本研究は、倫理委員会の審査を受け承認された後に、関連の研究倫理指針に従って実施されるものです。

研究期間：(2025年9月2日 ～ 2027年3月31日)

〔研究課題〕 認知症疾患における病態失認についての後ろ向き研究

〔研究目的〕 病態失認(anosognosia)は、Babinskiらによって1922年に提唱された概念で、病態に対する自覚の欠如を意味します。例えばアルツハイマー型認知症患者様のうち一定数は、病期のある時点で anosognosia を呈するようになることが知られています。Anosognosia を呈するようになると、認知機能低下に伴って日常生活動作(activities of daily living: ADL)が低下したりするようになるものの、それらに対する自覚症状の欠如あるいは否認を認めるようになります。Anosognosia を呈する患者様に関しては、anosognosia の存在が適切なサービス介入の妨げや、介護者の介護負担の増大の要因の一つとなり得ます。アルツハイマー型認知症における anosognosia に関しては以前から数多く研究がなされていますが、非アルツハイマー型認知症においては十分な検討がなされていないのが現状です。今回我々は異なる認知症疾患の anosognosia の性質を比較検討し、その臨床的意義を明らかにすることを目的としています。

〔研究意義〕 脳神経内科領域の日常診療において、扱う認知症はアルツハイマー型認知症だけではありません。認知症を呈する様々な疾患における anosognosia の性質の違いを見出すことで、医療者の認知症に対する理解を深め、認知症診療の質の向上に繋がれば意義が大きいと考えます。

〔対象・研究方法〕 2021年1月1日から2025年7月末までに、帝京大学医学部附属病院脳神経内科及び板橋中央総合病院脳神経内科の外来に紹介された患者様、帝京大学医学部附属病院脳神経内科及び板橋中央総合病院脳神経内科に初診外来として紹介された患者様、及び帝京大学医学部附属病院脳神経内科及び板橋中央総合病院脳神経内科に入院された患者様の臨床情報(対象期間は2021年1月1日～2025年7月末)を後ろ向きに検討し、エントリー基準を設けて認知症および軽度認知障害(MCI)患者様をピックアップします。それらの症例の臨床的特徴を検討します。

〔研究機関名〕 研究代表機関 帝京大学(研究代表者 萩原夕紀)、共同研究機関 板橋中央総合病院

〔個人情報の取り扱い〕収集したデータは、個人毎に情報を加工したデータとしてデータ管理責任者が常時施錠される医局内のコンピュータのハードディスクに責任をもって保管し、パスワードを設定して研究責任者及びデータ管理責任者以外がアクセスできない体制とします。研究終了後には研究責任者が保管の対象となる記録類一式をDVD-Rに記録し、封かん用封筒に詰め、帝京大学医学系研究倫理委員会事務局に提出し、帝京大学臨床研究センター(以下、「TARC」)にて保管させていただきます。TARCによる保管期間は研究終了から10年であり、研究責任者から延長の申し出がない場合は、TARCにより適切に破棄されます。また、学会論文等での公表は集計結果のみであり、個々人の情報は提示しません。

対象となる患者様で、ご自身の検査結果などの研究への使用をご承諾いただけない場合や、研究についてより詳しい内容をお知りになりたい場合は、下記の問い合わせ先までご連絡下さい。

ご協力よろしくお願い申し上げます。

問 い 合 わ せ 先

研究責任者: 帝京大学医学部脳神経内科学講座・臨床助手 萩原夕紀
研究分担者: 帝京大学医学部脳神経内科学講座・主任教授 小林俊輔
住所: 東京都板橋区加賀 2-11-1 帝京大学医学部附属病院脳神経内科(03-3964-1211)